

86 C 32
(86 E 2)

特 許 庁

特 許 出 願 公 告

特 許 公 報

昭34-3622

公告 昭 34.5.15 出願 昭 31.11.12 特願 昭 31-28648

出願人 発明者 中 西 正 光 東京都新宿区戸塚町3の934
代理人 弁理士 伊 藤 銀 之 助

(全4頁)

耐 力 壁 施 工 法

図 面 の 略 解

図面は本発明に係る耐力壁施工法を実施例につき説明する図面で、第1図及び第2図は本耐力壁施工法において採用される壁ブロックの2種を示した斜面図で前者はブロック相互間に4本の縦筋を配置する場合の壁ブロック、後者は同縦筋が2本の場合のブロックをそれぞれ図示したもので、第3図乃至第10図は第2図図示の縦筋2本の壁ブロックを用いて本発明の耐力壁を施工していく順序を説明図示したもので第3図は同ブロックを定板上に縦1列に列べ中心に通したボルトにより仮締めした状況を表した平面図、第4図はその端面図、第5図はこの仮締めされた縦1列の壁ブロック群の2群を建起して基礎上に予め埋込まれた縦筋間に挿入し同基礎に対し縦筋の上端のナットで締付け且ブロック群相互間を横筋兼用の横ボルトを以て締付けた状態を示す正面図、第6図は第5図のb-b線に沿つて見た下面図、第7図は第5図のa-a線切断側面図、第8図乃至第10図は本施工法による耐力壁を備えた建物の一部を示したもので第8図は第9図のc-c線による切断平面図、第9図は上記建物の一部の正面図、第10図は第9図のd-d線切断側面図である。

発明の詳細なる説明

この発明は特定な壁ブロックを用いて所要幅の強力な耐力壁を容易に施工できる甚だ有効な方法を提案する発明に係り先ずその要旨とするところを図面記載の実施例につき説明すると両側面の凹所1,1内に縦筋通し用縦溝2,2を形成し且両側面凹所1,1に連がる横筋通し用横溝3を設けた壁ブロック4を定板5上において相互間にペースト6を塗り所要段数だけ列べ各ブロック4の中心縦孔7にボルト8を通して仮着縫合し縦1列の壁ブロック群Pを構成しその所要群数を鉄筋コンクリート造の基礎9上に建起し同基礎に予め下端部を埋込み碇着した縦筋10,10を各群のブロック4の前記縦溝2,2にはめ各縦筋10の上端部にはめたナット11を締付けてブロック群Pを各群ごとに基礎9上に樹立すると共に隣接する相互間の連繋をブロック対向面にペースト12を介在させ各ブロック4

の前記横溝3に通した横筋兼ボルト13の締付けにより行つたのちブロック群Pの各ブロック側面凹所1にコンクリート14を打ち縦筋10を被覆し更に同凹所1に連がる横溝3内の鉄筋13をも被覆させ最後に各縦筋10の上端部に臥梁用アングル15を連繋取付けることを特徴とする耐力壁施工法を要旨とするものである。以下細部に互り説明すると壁ブロック4はその横筋通し用横溝3に打込みコンクリート14がよく回つているかどうかを後で点検する目的その他のために同横溝3に連がりブロックの一面に開口する溝16が設けられる。この場合同溝開口部を一時的に適当な板を以て塞ぐことが勿論必要となる。但しすべてのブロックに溝16を初めから開口させて設けておくと不都合な面も出て来るので所要力所のブロックだけ建築現場で開口するよう容易に切欠くことのできる薄板部を第1図鎖線図示のように溝16の外方端部において同溝の両壁部及び底部に互りブロック4と一体に予め形成しておけば好都合である。そして又ブロック4の他の部分には縦に抜ける空洞部17,17が形成され重量の軽減が計られる。定板5には定規杆18を取着け各ブロック4の正確な1列配列を容易としている。基礎9の上端には水平にモルタル均し塗り19が施されこの上にペーストを介し壁ブロック群Pが乗る。そのブロック仮着ボルト8の下側ナットを入込ませるためモルタル均し塗り19は部分的に欠除するカ所20を設ける。各ブロック群Pはこれを少しく持上げて上部を抵げた縦筋10,10間に容易にはめられ前記のようにして基礎9上に建てられ縦筋10,10の上端部のナット11の締付けにより確と樹立される。その後においては各ブロック4を縫合仮着した中央ボルト8の役は終るのでその下端部のナットを基礎均し塗りモルタル19の欠除カ所20から取外し同ボルト8を上方に引抜くものである。

但しこのボルトの或るものを構造物として残存させる希望のある場合には逆に上端部のナットを弛め取りボルト8とその孔7との間にペーストを上から注入し両者間にボンドを保有させ再び上部ナットを締付ければよい。その何れにしても

BEST AVAILABLE COPY

(2)

特公・昭 34-3622

均し塗りモルタル19の欠除カ所20は適当な時期において別にモルタル21を填めて塞がれる。ブロック群Pのブロック凹所1に打つコンクリート14の縦筋通し縦溝2内に入り難いと思われる例えば第8図及び第9図の右端の端部凹所1内の縦溝2に対してはその内壁面に予めペーストを塗っておき一層良好なボンドを得ることが期せられる。縦筋10の適所の上部ナット11の上にロックナットを螺合しその上に臥梁用アングル15をその孔を縦筋10にはめて連繋しナット22で取着ける。このアングル15の周りにコンクリートを打ち臥梁23が形成される。なお第8図及び第9図において本耐力壁は互な直角をなすよう各組のブロック群Pの内側部を衝き合せて配置され外隅部に互つてコンクリート14は角形にブロック群P-Pの両側端面凹所11を鉤形に継ぐよう打たれこのため同部分に最低の仮枠が必要となる。このコンクリート打ちと同時にコンクリート24を臥梁用アングル15から縦ボルト25,25で吊つた同様ブロック間及び下側に打つて大鴨居を形成するものが図示されている。コンクリート24を打つための仮枠も臥梁用アングル15から吊られ同コンクリートはブロック間及びブロックの前記空洞部を通じブロック下側にまで填まり大鴨居の下側ブロックの横溝に通した横筋26を包む。この横筋は両隣りの本耐力壁の外端部においてナット27で締められる。

さて本発明の耐力壁施工法において壁ブロック4は振動型により容易に製作され且これを個々に積重ねることなく定板5上において目地ペースト6を介して中心ボルト8で仮着縫合して基礎9上に建起し同基礎に予め埋込んだ縦筋10,10間に挿入し同縦筋上端部のナット11で締付樹立するから不馴の者でも容易にブロック積が行われ耐力壁として所要の幅は隣接するブロック群Pの数を増すことによつて容易に得られ且これらブロック群

は目地ペースト12を介し横ボルト13を以て確と連繋されコンクリート14の打込みにより横ボルト13はそのまゝ横筋となり各縦筋10及びその上端部を連繋する臥梁用アングル15等と相俟つて強力な耐力壁が筋違を用いることなく極めて容易に得られるもので又縦筋挿通孔のあけられた臥梁用アングル15は基礎9上に各縦筋10を埋込むときその位置を正確に決定する 当てがい 定規の役もする。

以上詳述したところから明らかなように本発明によればその要旨とする点に基き両面型の1種に属する特定な壁ブロックを使用して所要幅の強力な耐力壁を不熟練者でも頗る容易に施工することのできる優れた効果がありブロック造建築として強度上並に開口部を十分広く取る上にも甚だ有効な耐力壁施工法を初めて提案するものである。

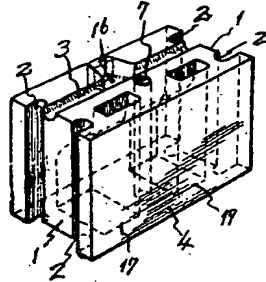
特 許 請 求 の 範 囲

両側面の凹所内に縦筋通し用縦溝を形成し且両側面凹所に連がる横筋通し用横溝を設けた壁ブロックを定板上において相互間にペーストを塗り所要段数だけ列べ各ブロックの中心縦孔にボルトを通して仮着縫合し縦1列の壁ブロック群を構成しその所要群数を鉄筋コンクリート造の基礎上に建起し同基礎に予め下端部を埋込み碇着した縦筋を各群のブロックの前記縦溝にはみ各縦筋の上端部にはめたナットを締付けてブロック群を各群ごとに基礎上に樹立すると共に隣接する相互間の連繋をブロック対向面にペーストを介在させ各ブロックの前記横溝に通した横筋兼ボルトの締付けにより行つたのちブロック群の各ブロック側面凹所にコンクリートを打ち縦筋を被覆し更に同凹所に連がる横溝内の横筋をも被覆させ最後に各縦筋の上端部に臥梁用アングルを連繋取着けることを特徴とする耐力壁施工法。

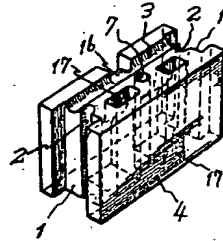
(3)

特公 昭 34-3622

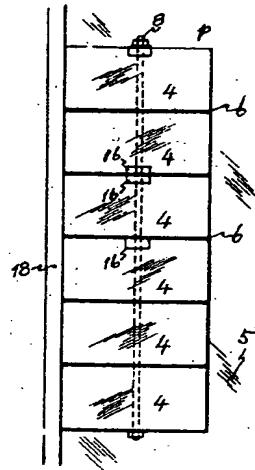
第1图



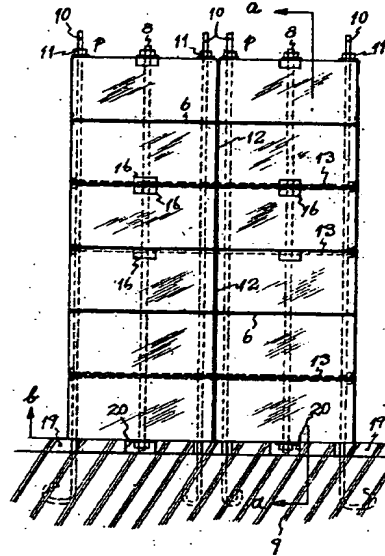
第2图



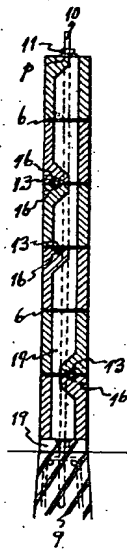
第3图



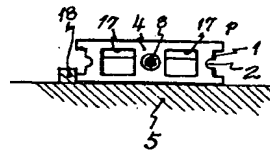
第5图



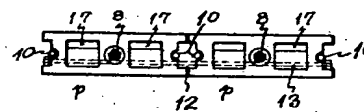
第7图



第4图



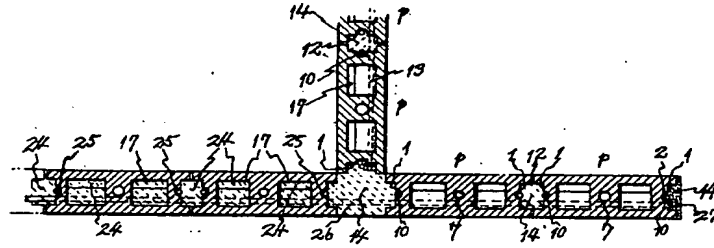
第6图



(4)

特公 昭 34-3622

第8図



第9図

第10図

